



Japan's Official Development Assistance
1987 Annual Report

1987

Ministry of Foreign Affairs

発行・国際協力推進協会

好評発売中 定価 2,000 円 (送料別)

目でみる援助プロジェクト



外務省監修
(財)国際協力推進協会発行

好評発売中

目でみる援助プロジェクト

わが国開発援助プロジェクトの実態の紹介とその評価などを、いくつかの代表的なプロジェクトを取り上げ、図、グラフ、写真などでわかりやすく解説。

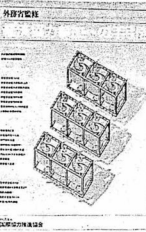
B 5 版、オールカラー 定価 1,500 円 (送料別)

全面改訂版 好評発売中

「経済協力参加への手引き」

わが国の経済協力の実態の紹介、その意義、仕組みなどを、図解入りでわかりやすく解説。

定価 4,000 円 (送料別)
外務省監修
(財)国際協力推進協会発行
B 5 版・103 頁



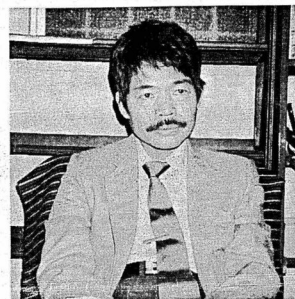
外務省監修

お問合わせ 財団法人 国際協力推進協会

〒105 東京都港区虎ノ門1-23-7
第23森ビル 9 F ☎03-504-2085 (代表)

わが町の国際協力 46

チャリティ・ショーでなく……



「海外援助のやり方の見直しを……」と中村哲さん。

福岡県福岡市

ベンチャール会

バキスタン北西辺境州にあつて、ある時は医科大学の教授。ある時は難民キャンプや山岳地帯を巡る赤ひげ。ある時は靴づくり職人。あるいは染め職人、編物講師。そしてある時はミッション病院のハンセン病治療に取り組み医師。そんな中村さんの活動を支えようと発足したのがベンチャール会である。

美しさと、貧しさと

「アレーツ、先生、手術じゃなかったんですか？」

事務局の辻睦雄さん（福岡市西福祉事務所勤務）と話している時だった。振り返ると、口ひげをたくわえた中年男性が立っている。疲れ果て、力なく、亡羊とした表情とでもいうか。

「病院に電話したら、これから手術だといわれましたよ」

「ほかの中村医師と間違えたんじゃないの」
ゆっくりと、静かに答える。目元の笑みが、その場に安らぎを広げた。

中村哲医師は、毎年夏に数カ月、ベシャワールから帰国する。現地の病院が、酷暑のため休院するからである。帰国した中村さんは、支援者に向けてのリポート、講演、そしてアルバイトとして病院勤務を行う。だが、今年は例年より1カ月ほど帰国が早まった。過労がたたって、肝炎の疑いありとの診断。日本で精密検査を受け、必要ならばまず自分の体を治さなければならない。幸い、検査の結果肝炎の疑いは消えた。

中村さんは、九州大学医学部を卒業、神経内科専門医、42歳。10年前の1978年、福岡登高会ヒンズークシュ山脈ティリチ・ミール峰登山隊の同行医師として、初めてパキスタン北西辺境州を訪れた。そこで、あまりにも美しい大自然に抱かれながら、あまりにも貧



ハンセン病棟の中で生活する患者たち。

い生活の中で病気に苦しむ人々の姿に接する。助けたくても、器具も薬もない。「自分の良心から逃げるように」帰国したものの、傷が残った。医者としての生き方に疑問を感じないわけにはいかなかった。

靴づくりも治療のうち

1981年、ベシャワールのミッション病院から日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）へ、医師派遣の要請があることを知った中村さんは、自らの使命としてこれに応じることにした。国内および英国で熱帯医学などを研修、3年後の84年5月、パキスタン北西辺境州ベシャワール市のミッション病院に赴任する。「本当に困っている人々とかかわりたい」と、ハンセン病治療に取り組む。

「現代の医学では、薬さえ飲んではいけば、ハンセン病が他人に伝染することはありません。しかし、薬の副作用で痛みを感じなくなるんです。そこで、粗末な靴によって足の裏をやられても本人が気づかず、化膿し、やがて歩けなくなる。ハンセン病患者の入院の半分近くがこうした理由なんです」。

ベシャワールの人たちは、伝統的なスタイルの靴（皮製サンダル）に固執する。大量生産の安いサンダルもあるのだが、見向きもせず、比較的高くて、しかも粗雑な出来の伝統的サンダルを履く。長く履いているから、やがてクギなども出てきて、これが足の裏を傷める。しかも痛点をなくしているから、かなり悪くなるまで本人も平気であるのだ。

「まず、この靴の問題を解決しなくちゃならないと思ひましてね」。

中村さんは、現地の靴を履いて、ゴツゴツとした岩山を歩き回る。10足は履きつぶしたろうか。さすがにこの土地に合った機能を備えていることはわかった。ただ、素材が悪過ぎるのである。もっと柔らかない皮で、ラバークッションをはさみ、足底に合うようにつく



ハンセン病患者を診察する中村さん。

ればいい。初めは、1人1人の患者の足底を計るオーダーメイド。だが、これでは時間がかり過ぎる。2万人近い患者がいるのである。ある程度データも整ったところで、号数を定めての、いわゆるイージーオーダーに切り換えた。入院中の患者たちにも手伝わせることにした。これには二重の効果がある。一つは足を傷めた患者が、退屈まぎれに歩き回ったりしなくなるから、治りが早まる。そしてもう一つは、手間賃として月に5～6,000円の収入が得られることだ。

靴の材料費は、日本のベシャワール会からの援助。市価6～700円の同型の靴を、さらに材料も、出来もよいのに400円程度（患者にはその半額）で売る。これが働いた人の手間賃になる。こうして、入院出稼ぎ体制が、軌道に乗りつつある。

同じような目的で、患者の精神的安定と経済的な負担を軽くするため編み物の講習を始めた。ジュートで伝統工芸の手さげバックなどをつくる。これを買って、日本でバーゲンセールなどを行う。しかし、デザインや

色柄など日本人向けにはもう一工夫が必要。中村さんは染色の研究も始めた。イスラム教の信者たちが欠かさぬ祈りの際、足を痛めめようと、いわゆる座ぶとんのような柔らかなマットづくりもある。

「日本から現地を訪れた人たちが、私の仕事振りを見て、がっかりする場合もあるらしいのですがね。靴や編物や座ぶとんづくりに精を出している姿を見て。しかし、それも治療の一部なんです。チャリティ・ショーでは駄目なんです。レポート出して、人々を感激させるために活動してるわけでもない。少ない金でどれだけの人々を助けられるか。それがすべてなんです」。

「官民一体の支援を

「ベシャワール会」は、こうした中村医師の活動を支えようと、友人・知人が集まって、1983年秋に結成された。よりよい医療活動ができるように、薬品、巡回診療車、脳波計、家族旅費（夫人・子息3人もベシャワールに同行）などを支援していこうというもの。中

村医師の現地報告を中心にした“会報”を発行し、活動への理解を求めるとともに、支援を通じてアジアの問題を考えていこうとする。現在会員は個人・団体合わせて約700人。

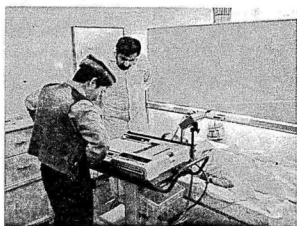
戦争と難民があふれるパキスタン北西辺境州の“砂漠”社会。そこに病気に苦しむ人々の体と心をいやす“オアシス”を創ろうとする試み。「少なくとも10年は腰を据える」という中村医師の活動を支えるため、ベシャワール会は協力を呼びかける。

だが、中村医師の“人柄”に引かれての支援活動は、ベシャワールからハンセン病を一掃したいという医師の願いからすると、まだ不足している。

「経済大国といわれ、莫大な経済協力を行っている日本ですが、そのやり方はどちらかといえば大物主義で、援助しながら相手先をスボイルし、あるいは反感を買っている場合だってあるのです。もっときめ細かな援助、協力を考える時期にきていると思います。そうした意味での危機感をもつべきじゃないでしょうか」と、中村さんは問題提起する。

例えば、パキスタン内にも、欧米各国の援助プロジェクトは多数あるが、いずれも官民一体となつての、組織立った活動が目につく。欧米の民間ボランティア団体は、キリスト教系のバックがあって資金源は比較的豊富だが、それらの活動に対する政府、現地大使館の支援体制もしっかりしている。必要機材の購入などはノー・タックス、手続き上の便宜を図る。

「その点どうも日本はねえ。システムが硬直化している面はあると思います。政府からの援助に期待しても、一定の水準、認められる条件を満たしていないと相手にしてもらえない。靴をつくったり、靴物を教えたなりは、支援プロジェクトの範疇に入らないんですよ。だから、そこから始めなければ、本当に困っている人たちは救えないんです。現地でのニ-



ベシャワールの会から贈られた脳波計を使って診断。

ズというものは、それこそ千差万別。その異質さ、多様さにまず謙虚に向かい合うことから始めなければならないと思いますね」。

日本のNGOに対しては、中村さんは問題意識を投げかける。例えば、人材は派遣するが、物や金は贈らないというグループ。そこに至るまでの経緯がわからなくはないが、あれもないこれもないという悲惨な状況の中で、人だけを送り込んで何ができるのだろうか。あるいは立派なプロジェクトをもちながら、政府からの援助を受けるとヒモ付きになるという固定観念に縛られて、かたくなにそれを辞退するグループもある。

「いろいろな事情はあるでしょうが、もう少しNGOも妥協性をもって、官民が一体となつてやっていくべきじゃないでしょうか。大切なのは、苦しみにあえんでいる人々を助けることにあるのですから……」。

医療活動1週間

中村医師が、現地で靴や編物を教えているばかりとの誤解を招かぬよう、現地地のある1週間を追ってみよう。イスラム国での1週間は土曜日に始まる。

土曜日、8時半。ミッション病院のハンセン病棟で働く現地スタッフ4人を集めて、ハンセン病の病徴例と処置法について講義。英語とウルドゥー語によるこの講義は、毎週土曜日と火曜日の朝行われる。講義後、入院患

者の回診。回診を終えると、ある患者の足の骨の整形手術。そして、外来患者の診察。

日曜日。回診、外来患者の診察の後、車で公営病院のハンセン病棟へ。毎日曜こを訪れ、パキスタン人医師などから、治療についての相談を受ける。

月曜日。カイバル医科大学からの依頼で、ハンセン病に関する講義を月2回ほど行っており、この日医学生15人がやってきた。また、保健婦専門学校の学生たちにも、実習を兼ねて、ハンセン病についての指導を実施している。

火曜日。現地スタッフへの講義。回診、外来患者の診察。

水曜日は10時からベシャワール大学附属のカイバル病院で、木曜日は3時からアフガン・レプロシー・サービスで「てんかん」治療に関するセミナーを実施。受講者はカイバル病院の神経科の若い医師たち5人と、アフガン・レプロシー・サービスに常駐するアフガン人医師シャワリ氏。ハンセン病と同じく神経疾患でありながら、これまで治療がなおざりにベシャワール大学で講義をする中村さん。若い医者を育てることも、重要な仕事のひとつだ。

されてきた「てんかん」について、医療レベルの向上に力を入れている。中村医師が個人用にと持参した脳波計を使っての講義に、若い医師たちが目の色を輝かせて聞き入る。

平日の午後は、ベシャワール市郊外のユニバーシティ・タウンにあるアフガン・レプロシー・サービスの事務所に結んでいる。現在、名古屋サウス・ライオンズ・クラブの援助で増築が行われており、ここが難民キャンプおよび北部山岳地帯への巡回診療の基地となる。

金曜日は、手術後の患者の診察を除くと、唯一の休養日。

しかし、これらのスケジュールをめぐって、サンダル工場の指導、医療器具の購入あるいは寄贈される医療器具・医薬品の受け出し手続き、病棟を訪れる各国医療機関関係者への応待など、医療以外の雑用にも追われる毎日なのである。いつまでも元気に活躍されることを願わずにいられない。

●連絡先 ベシャワール会
〒810 福岡市中央区天神1-10-24
(福岡三和ビル4F) ☎092-781-7410

